集落ぐるみの集団転作を勧めます

昭和57年度 水田利用再編対策推進方針から

四年前から米の需給バランスを保つため、政府は水田利用再編対策を行ってきました。五十七年度は第二期対策の二年目にあたり、白根市ではこのほど、集団転作を基本とした推進方針をまとめました。こうした中で、麦作で一〇アール当たり六五五・五キロの収量をあげた野沢英之さん（中央通り）が、全国表彰を受けました。野沢さんの実例をふまえ、転作について考えてみましょう。

重点作物として普及奨励している大麦、大豆の集団転作で、土地の有効利用と農業所得の確保を

56年度の達成率は一〇五・三％でした

五十六年度に当市が農家へ配分した転作目標面積は七百六十三ヘクタールです。実際に転作などを行ったのは八百四・六ヘクタールで、達成率は一〇五・三パーセントでした。集団転作を奨励した結果、八十五集落、四十集団が団地化されました。

転作状況は、【表1】のように野菜にかわって、重点作物の大麦と大豆が増えてきました。

二年続きの冷害で、全国的には不作となったものの、米は依然過剰基調であり、当市には五十七年度も引き続き同程度の転作目標面積が配分されるものと予想されます。

そこで、集落ぐるみの計画転作の推進を基礎としながら、土地や労働生産性の向上を図るため、連担団地化を促進し、高い収益を上げる集団転作を確立していく必要があります。まだ集団転作を実施していない集落を集団化の方向に誘導し、計画転作率七〇パーセントの五百ヘクタール、連担団地化率五〇パーセントの三百六十ヘクタールを目標に掲げています。

そのため、預託水田や青刈り稲などの転作実施面積が増加している状況から、捨て作りや散在した転作を減らし、生産性と収益性の高い集団転作を進めたいものです。集落段階の話し合いに基づく協同活動の実践が大切です。耕作交換、作業委託、農用地利用権の設定など土地利用調整を進め、複合営農を実現するため、作物によっては田畑輪換方式を採用して、土地の合理的利用を図りましょう。

大豆と大麦の輪作で効率的な土地利用を

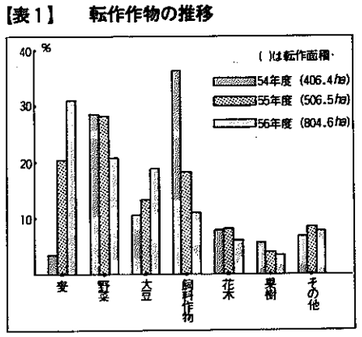
また市では普及奨励する重点作物に、大豆と大麦をあげています。大豆は比較的容易に栽培が可能で、需給見通しもあり、大麦は稲作機械が活用できて省力的な作物であることから、水系ごとに団地化を進めていきましょう。そして、大麦と大豆の輪作体系の普及を図り、効率的な土地利用を推進していかなければなりません。

果樹、野菜、花き類などの園芸作物は、一部を除き、ほぼ需給がつり合い、産地間競争や価格変動も激しい環境にあります。労働集約的で栽培面積の拡大にも限界があります。都市近郊型産地の立地条件を生かし、土地条件を整備しながら、市場競争力のある産地作りをしていく必要があります。

水田預託、青刈り稲については、土地の有効利用と農業所得確保の面からも、ほかの作物に転換することが得策のようです。

労働力不足などのため、集団転作に参加できない農家の解決策として、転作を引き受ける営農集団を育成し、土地利用の向上と、効率の良い転作を進めていきたいものです。

【表1】 転作作物の推移



麦作で10アール656キログラムの収量をあげて全国表彰

県内で初の快挙―野沢英之さん（中央通り）

転作の重点作物となっている大麦栽培は、比較的少雪の下越地方がその作付面積二千ヘクタールの約八十パーセントを占めています。ことしは異常豪雪だったものの、白根市の場合は大麦の根雪日数が限界の九十日を超えることなく、しかも種まき時期を早めて越冬態勢を強化し、排水と適期施肥で順調な生育に恵まれました。

十月に行われた県麦作共励会の審査結果では、参加ほ場の一〇アール当たり平均収量は、個人の部が五八五キロ（昨年四九〇キロ）、集団の部が四五六キロ（昨年四〇五キロ）と、これまでにない多収をあげました。品質も上位等級（一、二等）比率が高く、特に個人ではすべて上位等級で、六〇〇キロ以上収穫した農家が、初めて六戸もありました。その多収穫をあげた六戸は、すべて白根市の農家で、二十位中に市内の農家が十戸も入るという好成績でした。

県審査の上位入賞者は【表2】とおりです。

集団の部でも、県審査に白根農家組合が一〇アール当たり五五一・七キロをあげて最優秀賞を、四九〇・七キロをあげた蔵主農家組合が第二位に入るなど、すばらしい成績を残しました。

この中で、最優秀賞に選ばれたのは、一〇アール当たり六五五・五キロの収量と、品質も全量が一等だった野沢英之さん（中央通り）。次いで東北・北陸ブロック代表に選ばれて、農林水産省などで構成する全国麦作共励会に推薦したところ、個人の部で晴れの全国農協中央会長賞を受賞。収量では全国トップの成績だったそうです。

【表2】 56年度県麦作共励会受賞者

個人の部	（白根市関係者・敬称略）
1位	野沢英之（中央通り）
2位	上杉美春（北田中）
3位	関根文雄（北田中）
4位	夏川禎吉（蔵主）
5位	田村正直（十五間）
6位	岡田佐喜男（北田中）
集団の部	
1位	白根農家組合
2位	蔵主農家組合

農業改良普及員と談笑する野沢さん夫妻

年々強化される転作に本腰入れて集団化

「初めての大麦栽培でまさかとは思いましたが、やはりうれしかったですね。転作は避けて通れない道ですから、どうせ作るなら冬期も育てる楽しみがあって、所得になる作物ということで、それまでのクローバー栽培から大麦栽培を試みたわけです。手がかからず、稲作の機械が利用できることが大きなメリットです。初めてということで、農業改良普及員や市の指導を忠実に守ったのが、良かったのでしょうね」

野沢さんは水田六・三五ヘクタール、畑〇・〇五ヘクタールを耕作する専業農家。これまでは飼料作物を転作作物として栽培してきたものの、減反が年々強化され、転作目標面積が広がってきたため本腰を入れて転作に取り組み始めました。

農業仲間に呼びかけ、話し合いを繰り返した末、暗きょ排水設備の完備した水田八ヘクタールを集団転作地として確保。ここに自作地を持っていたものの、大規模化を図るため、隣接していない自分の土地と、仲間の土地とを耕作交換して一・二ヘクタールのほ場を確保しました。

肥培管理と乾燥に努めたのが成功の要因

昨年十月四日に種をまき、元肥のほかに麦の生育に合わせ、年明けまでに二回、ことし三月に一回、穂肥として四月に二回と合わせて五回の追肥で、生育の均一化を図りました。

大麦の根雪限界日数の九十日近い豪雪にもかかわらず、順調に生育。今年六月にはみごとな黄金色の穂を実らせ、刈り取ってみたらなんと一〇アール当たり六五五・五キロのみごとな収量をあげることができました。

集団化により、一〇アール当たりの労働時間も十時間半あまりと、省力化に成功したほか、稲作との機械共用で、農機具経費をコストダウンすることができました。

「不安だらけで出発した大麦栽培が、こんなにも順調にできたのは、集団転作による協同化がうまく行ったのでしょう。ほかの人より良かったのはまぐれですよ。今後は、稲作を主体に、借地も含めて二ヘクタールの麦作を目標に、麦―大豆―大豆の二年三作の輪作をめざしていきます」と、抱負を語っていました。

▶寒空の中、追肥作業に余念のない野沢英之さんと千代さん